

「スモウはエキサイティング」

外国人留学生が

中大相撲部の猛稽古を見学

第1体育館の地下に下りる。ドア

を開けると、そこは勇気全開の新世界。

土俵の上で、裸の相撲部員が稽古の

真っ最中だった。飛び散る汗、荒い

息遣い……。国際交流センターの「中

央サマープログラム」で日本を訪れ

ている留学生10人ほどが、7月7日、

中大相撲部道場を訪ね、なまの相撲

を見学した。

引率者は、飯田朝子・商学部助教。

小柄な体が選手たちに囲まれるとよ

けいに小さく見える。大の相撲好き

で、研究室には中大出身の幕内力士

たちの色紙などがデンと飾られている。

国際交流センターから英語で日

本の文化を伝えてほしいと依頼され

5年前から留学生を毎年案内してい

るのだという。「柔道や剣道も日本

古来のスポーツですが、幼稚園時代

から好きだった相撲を」と、先生は

楽しそうに笑う。

激しい練習

リラックス観戦

土俵では、ちょうど「申

し合い」と呼ばれる練習が

続いていた。勝ち抜き方式

で、勝った選手が次の相手

を指名して相撲を取る。勝

負が決まると、自分を指名

してもらおうと声をあげて

勝った選手に全員が殺到す

る。

その様子を留学生たちは、

相撲解説の英文プリントを

手に、上がり座敷の一目目

で観戦した。

伝統的なスポーツは姿勢

を正して正座しながら見な

きゃいけない——日本人で

ある記者はそんな前提が頭

にあるのだが、留学生たち



はおおらかに、自由そのもの。悪びれず足を伸ばして、リラックス。後方に手をついている留学生を見たときはなぜか冷や冷やしてしまった。こちらは軽いカルチャーショックである。

ギクツ。生々しい音が稽古場に響いた。押し出した選手が足をくじいたようだ。これには留学生も心配そうな顔。しかし、平岩大典監督は平

然として厳しい言葉をかけ、稽古は続く。そのあと、力量のほぼ同じ選手が三番続けてぶつかると「三番稽古」。最後に選手たちは柔軟体操を行うのだが、股割りと呼ばれるバレリーナ顔負けの開脚にはみな目を丸くして、盛んにカメラのフラッシュをたいていた。

彼らの目に相撲はどう映っただろう。

ウナギ、天ぷら、寿司と「日本食の王道」を好むアメリカからの留学生 Matt Shambo さんは、「テレビでは見たことがあったけど、伝統的なスポーツを直接見ることでできてうれしいよ」とにっこり。同じくアメリカ人留学生の Jennifer McGryn さんは、「スモウの稽古は、テレビでみる相撲とは違うのね。次は国技館でプロの相撲（大相撲）も見てみたい」と、また興味がわいたようだった。

ちゃんこ鍋囲んで

選手も英語で自己紹介

稽古見学のあとはちゃんこ鍋が振舞われた。稽古を終えたばかりの選手たちが、上半身裸で汗を流しながら



らちゃんこの準備をしてくれている。申し訳ないような気持ちである。「男の料理」がテーブルに並べられていく。もちろんメインはちゃんこ鍋なのだが、力士が食べるものはパスタでもカレーでもちゃんこと呼ばれているらしい。

4テーブルを総勢30人ほどが囲む。そして各テーブルの大鍋に2kgずつの鶏肉を投入（つまり計8kgの鶏肉）！留学生はとみれば、さして驚いた様子もなく、むしろいつに

なったら食べられるのかなといった表情が妙におかしかった。

選手たちと留学生の間で自己紹介。英語で自己紹介するのに戸惑い日本語で紹介しようとする部員に、飯田先生がすかさず、「ほら、英語使つて。授業でやったじゃない」と声をかける。

最初のうちはぎこちなかったものの、富田有輝さん（商学部3年）は同じテーブルに座った留学生とビール談義を交わし、隣のテーブルでは流暢な日本語を話すフランス人留学生が座を盛り上げて和気藹々。まあ多少のコトバの壁は抜きにして、楽しげに留学生のハシも進んでいた。

「双方に有意義な異文化交流」

引率の飯田朝子助教授

相撲部員と留学生の交流は、留学生のための異文化交流と思われるが、実は相撲部も留学生からいい影響を受けていると飯田助教授は言う。「相撲は国際的スポーツ。だから、将来的には相撲を世界に普及させるためにその指導者になる必要もあるんです」。そのためには外国人と会話をして英語を学ぶ必要があるということだ。中村淳一郎さん（法学部

4年）は「ふだん外国人と交流する機会がないから楽しい。（稽古は）見られて恥ずかしいというより、むしろ見てくれ、という誇らしい気持ちですよ」と、これも交流4年目の自信である。

日本の伝統文化を国際的な側面から見ていくことで、「オレたちのスポーツは世界が注目している」という学生自身の意識変化にもつながると助教授は考えている。

「相撲部の部員は気立てもいいんです。上下関係を大事にし心身をも鍛えることは、日本の美德、一つの文化だと思っんです」

ロハス商品のお披露目授業も

商学部・飯田ゼミ

その3日前の7月4日、商学部・飯田ゼミでは、「開発商品」のお披露目授業があつた。写真上／飯田先生（中央）とゼミ生。

商品名「和で包んだトイレットロール」。飯田ゼミと王子ネピアが共同開発したトイレットペーパーの新製品である。これはゼミの活動の一環としてロハスな生活を提案する月刊誌「ソトコト」の「それ、つく

りますプロジェクト」に応募、ゼミ生の商学部2年生・村田文彦さんの提案が採用され、製品化された。できあがつた商品は、生産途中に出る和紙のような廃棄紙を再利用、トイレットロールに美しくまとわせ、12ロールセットで紙繊維を織った風呂敷で包んである。風呂敷は昔の人の無駄のない包装の知恵。それをエコロジーに活かした商品である。

お披露目授業には、ネピアをはじめプロジェクト発起人の電通のコーピライターの、さらにはデザイナーを手がけたアートディレクターらが講演、他の学生のアイデアも紹介して商品開発までのエピソードなどを披露した。

学生に刺激を与え、企業にとっても学生の視点を取り入れることによつて新たな切り口での商品開発という相互メリット。これも産学協同の一つである。

ネピアオンラインセレクトショップ (http://shopnepia.co.jp/products/lohas_top.php) で商品紹介されている。

（学生記者 大池夏末 総合政策学部3年）